羽衣国際大学　令和七年度卒業証書・学位記授与式　式辞

本日、ここに羽衣国際大学令和七年度卒業証書・学位記授与式を挙行できますことは、本学にとって大きな慶びです。

ただいま現代社会学部　一四五名、人間生活学部九三名、合計二三八名の卒業生に、「学士」の学位を授与致しました。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。またこのたび卒業される皆さんを育て、支えてこられたご家族や関係者の皆様も、たいへんお喜びのことと存じます。本日は、羽衣国際大学の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。

また本日は、多くのご来賓の皆様にご臨席いただいております。この四年間、学生たちと大学を温かく見守ってくださり、年度末のご多忙の中、本日の卒業式にご出席いただきましたこと、大学を代表し、心より厚く御礼申し上げます。

本日卒業される皆さんの多くは、高校二年生の頃、新型コロナウィルスによるパンデミックが発生し、緊急事態宣言発令によって、それまでとは全く異なる高校生活をよぎなくされた学年でした。

幸い大学入学後二年目以降は、本学においてもコロナ禍以前の日常がほぼ戻り、海外研修を含む学外活動においても、心に残る思い出も作ることができたのではないかと思います。皆さんが今日手にした卒業証書には、このような皆さん自身のご努力や思い出とともに、今日まで皆さんを有形無形に支えてくださったご家族や周りの方々のご支援と温かいお気持ちがつまっています。ぜひその方々への感謝の気持ちを忘れないようにしてください。

さて、昨年の二〇二五年、ここ大阪では、五十五年ぶりに、大阪・関西万博が開催されました。皆さんのなかには、様々な形でこの万博に関わった方々もおられます。万国博覧会の歴史は長く、第一回目はヴィクトリア女王が統治するイギリスの首都ロンドンで、産業革命の成果である最新技術の展示を主たる目的として、一八五一年に開催されました。日本でいえば、ちょうどペリー来航の二年前、嘉永四年にあたります。会場となった通称クリスタル・パレスは、鉄骨とガラスで作られ、長さ五六四メートル、幅一二四メートル、高さ三九メートルという巨大な建物で、標準化されたユニット設計によって、あらかじめ部材を工場で生産できるプレ・ファブリケーション、いわゆるプレハブ建築の先駆けとなりました。日本が初めて万博に参加したのは、それから一六年後の一八六七年にパリで開催された万博でした。徳川幕府による使節団の一員だった渋沢栄一が、初めて見るエレベーターに乗ってはしゃぐ姿が、彼を主人公とした大河ドラマ「青天を衝く」の一シーンで描かれていましたが、ご覧になった方もいるかもしれません。それから一六〇年以上経過した昨年の万博では、進歩礼賛一辺倒の時代はすでに過ぎ、かけがえのない「いのち」をテーマに、自然との共生や世界との共創、ともに創造することの大切さがテーマとなりました。

しかし、多くの「いのち」を育むこの地球において、気候変動は肌で感じることができるほど、差し迫った危機となり、ウクライナ、ガザを初めとする戦争は、停戦に向けた様々な取り組みはなされているものの、恒久的な平和を保障できるような出口はいまだ見えていません。戦争ほど、人の命を奪い、環境を破壊し生態系全体を脅かすものはありません。にもかかわらず、先月の末には、新たにイスラエルとアメリカによるイランへの攻撃が始まりました。

今も昔も世界を知るためには、ニュースから情報を得ることは欠かせません。しかし、昨今よく耳にする言葉に「フェイクニュース」という言葉があります。世界中いかなる言語の言葉も、カタカナで表記すれば即日本語として使うことができる便利さによって、フェイクニュースといえば何か新しいもののような印象を与えかねませんが、決して新しいものではありません。

いわゆる「偽情報」「デマ」は、昔から存在し、政治や、戦争、経済的な利益を上げるためなどに利用されたり、社会に混乱をもたらしたりしました。古くは初代ローマ皇帝となるオクタヴィアヌスが政敵のアントニヌスに対して、エジプトの女王クレオパトラに操られているという偽情報を、インターネットもない時代ですから、詩などを使って流し、アントニヌスはローマの価値観を捨てた堕落者であるというイメージを広め、世論を味方につけました。一八世紀末のフランス革命の時期には、王妃マリー・アントワネットが、民衆の生活が窮乏する

状況を聞いて「パンがなければケーキを食べればいいのに」と述べたとされる有名なエピソードは、実際には彼女の発言ではないにも関わらず、その昔外国であるオーストリアから嫁いできた王妃をことさらに悪女に仕立てようというネガティブキャンペーンでした。

日本においても、十四世紀半ばに吉田兼好がまとめたとされる『徒然草』には、「世に語り伝ふる事、まことはあいなきにや、多くは皆、空言(そらごと)なり。」とあります。島内裕子氏の現代語訳によりますと、「世間で語り伝えることは、本当のことはつまらないのか、多くは皆、虚言(そらごと)である。」(兼好『徒然草』島内裕子　校訂・訳　ちくま学芸文庫)そして、兼好は続けて「もっともらしく、ところどころぼやかして、よく知らぬ振りをして、そうしていながら、つじつまを合わせて本当らしく語る虚言は、恐ろしいものである」と述べ、その対策として、「嘘が世の中にあふれているという状況が、いつも普通にあるものだと、ありのままに心得ておけば、万事に付け、きっと間違いない対応ができるだろう」としています。

兼好と同じく十四世紀に、日本から遠く離れた北アフリカのチュニジアで生まれた歴史哲学者のイブン・ハルドゥーンは、きちんとした史料批判に基づいた歴史書に比して、勝手に作り出した偽りの噂話を取り入れたり、みずから捏造し考え出した根拠の薄弱な物語で飾られたりした著作の有害性を警告しています。(イブン・ハルドゥーン『歴史序説』森本公誠訳　岩波書店)

新聞やテレビなど伝統的なマス・メディアは、紙面や放映時間の制約があるため、詳しく後追い報道を続けることが難しいことが多く、次々と取り上げるニュースが変化します。SNSやインターネットは、誰もが簡単に発信できる便利さを持つ反面、その真偽が十分に確認されずに情報が流されることが多くあります。さらに現代は、AIの発展により、より簡単にフェイクニュースを作ることができる時代です。重要なことはフェイクニュースであっても、それを信じた人々がその情報に基づいて実際の行動を起こすことで、現実の世界も変容することです。

AIを初めとする新しい技術は、便利であり、これからの社会を生きる皆さんにとって、その活用法を知ることは不可欠ですが、その使い方を誤れば、あるいは意図的に悪用すれば、本来の目的から外れ、社会に大きな混乱をもたらし、人を不幸に陥れます。AIは多くの情報とその分析結果を素早く提供してくれますが、その真偽や良し悪しの判断は最終的には人間の手に委ねられています。私たちが学び続けなければならない理由と必要性は、まさにその点にあります。

ですから、これからの社会を担う皆さん方は、今日の卒業式は学びの最終日ではないということをぜひ心にとどめておいてほしいと思います。むしろこれから出会う様々な喜びと共に、幾多の困難を乗り越えていくためには、私たちすべての共有財産である歴史や古典を含めて、日々学びを継続することが不可欠です。社会に出て、これまでの環境では出会うことのなかった人々とも出会い、自らの持つ知識が不足していることをいやおうなく自覚させられる機会もあるでしょう。しかし、そこで決してうろたえたり、あきらめたりしないでください。

私たち教職員も、この四年間、皆さんから多くを学びました。四年の間しっかりと学び、学士となられた皆さんには、社会に出てから新たな学びを積み重ねるだけの確たる基礎が備わっています。本学の建学の精神である「愛真教育を基盤とした自由・自主・自律・個性尊重の人間教育」に謳われているように、真実を見極める力、そして自己と共に他者を尊重する能力を、明日からの活躍の場となる社会での活動の中で、磨きをかけてください。そして、どうか本学の卒業生であることに自信をもって、しかし慢心することなく、謙虚に日々歩んでいってください。

今、社会には多くの課題が山積していると同時に、皆さんを必要としている方々が大勢います。ぜひまずは周りの人々のために何ができるのか、を考えて、世界の様々な問題に思いをはせ、一日一日自分の意思で前に進み、少しずつより良い社会を築いていってほしいと思います。

私たち教職員にとって、皆さんの旅立ちは名残惜しい限りですが、同時に大変誇らしく思います。これからも皆さんのことをいつまでも見守っています。

皆さんが明日からの人生を、夢を持って一歩一歩進んでいかれることを心から祈念し、卒業式の式辞といたします。

令和八年三月一八日

羽衣国際大学学長　中川　恵